



破格について

筑波大学医学医療系

志賀 隆

破格と聞いて何を思い浮かべるでしょうか？例えば、「破格の待遇、破格の安値」などでしょうか。国語辞典によると、破格とは「一．しきたりや通例を破って並はずれていること。また、そのさま。二．詩や文章などで普通のさまりからはずれていること。また、そのさま。」とあります。

ところで解剖学の分野にも「破格」という専門用語があります。ステッドマンの医学大辞典によると破格 anomaly として「平均または正常から逸していること。構造的に見て一般的な規律に反し通常の形ではなく不規則であるこ

と。」とあります。解剖実習の手引き(寺田、藤田著・南山堂)でも破格に関連して「正常に二つの意味があり、一つは病気に対する正常、もう一つが統計的な標準であり、統計的な意味で正常からずれている状態を破格 anomaly、または変異 variation といふ」と説明しています。しかし現実問題としてどこからが正常からずれた破格であるかの境界は曖昧な場合があります。

解剖学における最大の破格の一つに内臓逆位があります。内臓逆位とは体内の内臓の位置が左右で逆転している状態のことです。以前目にした記事によると、アメリカオレゴン州で九十九歳で亡くなられた女性が献体され、学生の解剖実習によって内臓逆位が初めて判明したとありました。心臓の解剖を行なった学生たちは、本来心臓の右側

発行 筑波大学白菊会
茨城県つくば市
天王台1-1-1
解剖献体事務室
電話 029(853)3230
印刷 前田印刷株式会社
電話 029(875)6696



字 今井 凌雪(いまいりょうせつ)
潤一 大正十一年十二月十九日生
立命館大学卒
前筑波大学教授(芸術専門学群)
日展評議員・日本書芸院常務理事・
雪心会主宰
朝日書道千人展メンバー・日展文部大臣賞・
朝日書道賞、芸術院恩賜賞受賞

表 紙 題 字
筆 者 略 歴



筑波大学白菊会 第36回総会 平成30年10月3日

(右心房)に入る大静脈を確認できないため困惑して教員に質問しました。一方、基本的な質問を受けた教員も戸惑いでしたが、実は内臓逆位で心臓を含めて内臓が左右反転していました。百歳直前まで内臓逆位が判明しなかったのは、おそらく検査や手術とは無縁の生活を送っていたからかもしれません。ところで、この方が内臓逆位という破格を自覚しなかったことから推察すると、破格は必ずしも健康に影響を及ぼ



学長挨拶(慰霊式にて)

すわけではなく、普段の生活を送るのに困らない場合があることが予想されます。

新潟で開催された今年の解剖学会では、数は多くはありませんが筋の破格に関する発表がありました。上述したように、破格が必ずしも機能に影響を及ぼさないことを考えると、解剖学の研究や実習で破格を調べる意味は何でしょう。破格とは、個性、多様性であり、破格を調べる意義はつまるところご遺体に敬意を表すことだと思います。また、今年の解剖学会の解剖実習に関するワークショップでは、肉眼解剖学を専門とする名誉教授の先生の「解剖実習を行う際に解剖学用語を一旦(いったん)忘れよ」という言葉が紹介されました。一見すると逆説的で乱暴に聞こえますが、真意は解剖に際して教科書が無批判に信じる先入観を捨ててご遺体をしっかりと観察しなさいということだと思います。ご遺体の解剖ではありませんが、数十年前に私が大学の教養課程の生物学実習で行ったカエルの解剖の実習書には図が一つもなく、文章の説明だけがぎっしり書かれていました。

図があるとそれだけで理解した気になりがちですので、この場合も先入観を捨ててしっかりと対象を観察しなさいという意図だったと思います。先入観を捨ててご遺体に対峙する解剖実習が理想ですが、そのような実習は実習時間が限られている現在では難しいのが現状です。しかしながら、解剖に際してしっかりとご遺体に向き合うことは解剖実習の原点であり、本質であると思います。

近年、肉眼解剖実習でコンピューターを利用するケースを耳にすることがあります。この解剖学ソフトでは三次元構造が再現され、例えば血管や神経だけを抽出して他の臓器との関連を学ぶこともできるため非常に効率の良い学習ができるかもしれません。しかし、残念ながらこのようなソフトには破格まで再現されていません。このようなことを考えると、ご遺体の解剖を行う目的の一つは、人体の構造の破格、つまり多様性を学ぶことにあると思います。

追慕の辞

本日、ここに筑波大学篤志解剖体慰霊式が挙行されるにあたり、筑波大学白菊会会員を代表いたしましたして、謹んで「追慕の辞」を捧げます。

今日、生命科学がめざましく発展を遂げたおかげで、元気に百歳を超えて社会でご活躍されている方もかなり多くなりました。しかしながら、この急激な発展は地球規模での温暖化が進み、異常な気候変動によって、豊かで便利な生活環境・地球環境に深刻な歪みを生じています。我が国では近年大地震、火山噴火、記録的豪雨など大規模な自然災害が頻発、未だ記憶に新しい東日本大震災においては地震と津波によって東北地方太平洋沿岸部は壊滅的被害をもたらしました。さらに原発事故では安全神話が崩壊、放射性物質が陸地と海洋に漏れ出すかつて経験したことのない環境破壊を招きました。このよ

うな時代に生きる私達は今こそ、自然界の一員としての尊厳を持って、地球環境を守る責任とその覚悟を持つことが、大きな課題の一つになっていると思います。省みますとこの世に生を受けた私達は、動植物と同様「生命の限り」を持ちながら日々過ごしています。親しい人達との別れは辛く悲しいことですが、決して「永遠の別れ」にはならないと思います。なぜなら、ここにご献体された先人の尊い志を私達が受け継ぎ、後に続く人達に手渡すことで、いつまでも「生命が存在し続ける」ことになると思うからです。医師を目指す学生は、献体による系統解剖を行うことで「医の倫理教育」を通して、ご遺体に触れ人体構造を学ぶと共に、ご献体された方に対する感謝の気持ちと、人の命や健康を守る医学・医療の発展のための責任感や使命感を育みます。また、病理解剖は病気の経過と原因の究明・難病の研究や治療法開発に役立ち、死因が不明な場合は、法医解剖を行うことでその死因を解明することができます。これらの解剖がより良い社会を築く為、必要不可欠であることは皆様ご存知の通りであり、私達白菊会会員は、医学の基礎教育に貢献するために人生最後に「献体」する、この想

いが叶えられますことを切に願い、これからも日々の生活を慎んで過ごして参る所存です。

終わりに臨みまして、正常解剖、病理解剖、法医解剖をお許しくださいましたご遺族皆様方の計り知れないご厚意に改めて感謝を表すと共に、ご献体いただき御遺志を全うなされた方々の御冥福を心よりお祈り申し上げ、「追慕



の辞」とさせていただきます。

平成三十年十月三日

筑波大学白菊会会員代表

増田 禎子

追慕の辞

本日、筑波大学篤志解剖体慰霊式が挙行されるにあたり、解剖実習のために御献体くださいました方々に、医学群学生を代表して謹んで追悼の言葉を捧げます。

私たちは、御献体くださいました白菊会会員の皆様、並びにご遺族の方々のご厚意により、今年の五月から六週間の解剖実習を行わせていただくことができました。

追慕の辞をこうして皆様の前で読む今、解剖実習が始まったあの時からおよそ五カ月が経ちました。しかし、実習の初日、初めて御遺体を目にした時の今までに経験したことのないあの緊張感は、今でも忘れません。毎回、実習の始めに黙祷が行われるたびに、身が引き締まる思いを感じ、その緊張感

は実習を行なっている一カ月半の間消えることはありませんでした。

実習中は、血管や神経を丁寧に剖出することに夢中になって、気づいたら実習が終わる時間になっていました。毎日その日の範囲の予習はしていたのですが、実際の御遺体で見ると、教科書の通りでないことも多く、人体の複雑さや奥深さに驚かされました。また、人体に関する知識が増えると、医師に一步一步近づいていくようで、嬉しく思いました。

しかし、解剖実習で得られたことは今述べたような、医学的な知識だけではありません。知識だけであれば、医学書やコンピュータグラフィックスから得ることもできます。私が実習を通して学んだことは、御献体くださった方のご厚意のもとに本物の人体を解剖することは、単に医学的な知識を得る以上の大きな意義を持つということです。

その意義は「本物の人体を解剖するという経験と、その意味を深く考えること」から生じます。私は実習中に、目の前の御遺体は生前どのような方

あったのか、どのような人生を送ってこられたのか、どのようなお気持ちで御献体を決意されたのか、繰り返し考え続けました。自分の手で御遺体を解剖させていただかなければ、このような気持ちは生まれなかったと思います。そして、実習をするうちに、御献体くださった方に対する感謝の気持ちが、自分の中に自然に生まれてきました。



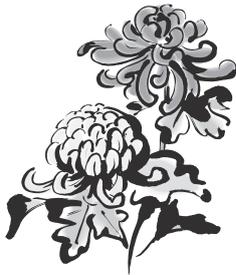
白菊会の皆様の期待に応えるために、私たちは立派な医師にならなければならぬと思います。そのために、勉強に励むことや人の気持ちを思いやることなど、医師としての心構えをずっと忘れないでいようと思います。

最後になりましたが、御献体いただきました方々のご冥福を心よりお祈り申し上げますとともに、肉親の死に際し、悲しみや苦しみの中、御献体にご理解くださり、ご協力していただいたご遺族の皆様への計り知れないご厚意に改めて感謝申し上げます、追慕の辞とさせていただきます。

平成三十年十月三日

医学群 医学類 二年

長田虎二郎



会員のみなきまからの便り

あれから三年

青木秀夫

六十歳を迎えた三年前、私は当白菊会に登録をしました。当時の心境や近況については、本誌第三十四号に記しました。あれから三年経過して、自身と家族の状況にも変化がありましたので、改めて投稿させて頂きます。

まずは家族構成ですが、二年半前に女の子の初孫が誕生しました。日々の成長を毎日見守ってられる今が至福であり、孫との拙い会話は私たち夫婦を癒してくれます。この幸せがいつまでも続きますようにと、祈らずにはいられません。

一歳半年上の妻は私を真似たのかどうか、昨年白菊会に登録致しました。結婚して四十年を過ぎましたが、普段の会話は非常に少なくて「まあ、世間様でもこんなものだろうな」と、思っています。

若い頃から大した趣味のなかった私は、二年前からクラシックギターのレッスンを始めました。ドレミファの音符も読めないもので、今でも苦労しています。昨年夏の発表会では弾き語りをしました。弾きながら歌うのは本当に難しいと実感しました。本稿が掲載される頃には、今年の発表会は終わっている筈ですが、満足できる演奏はできないだろうと確信しています。

昨年の発表会で感激したのは、私が通院している病院の主治医の先生が来てくれた事です。来てくれただけではなく、演奏の後に花束を頂戴しました。その花束を家に持ち帰ると、一体誰から貰ったのかと妻が驚いておりました。心に残る、良い思い出ができました。

五年前三カ所に転移した癌は、その後左肺にも転移したようで現在四カ所に転移中です。幸い重篤な症状も痛みもないので、毎日の晩酌と喫煙の習慣は暫く続くと思えます。特段の治療は受けていませんが、あまり不安はありません。時折、来年の予定を考えるとありますが、それより先のことは考えられません。人の寿命は神様しか

判りませんが、長生きはしなないと思っ
ています。ですので、毎日を楽しく過
ごすことを目標として今を生きている
次第です。

今想うこと

大 沢 敏 子

山村集落に生まれ育った私、狭い選
択肢の中から選んだ職種は、人に接す
る技術職であった。寡黙な私、ひたす
ら修業の日々の中、その道の指導者で
も知り合いでもないのに、見ているも
駄目、実践躬行が大事と云って、自ら、
一瞬を提供して下さる方が少なからず
で、ありがたい事でした。失敗も沢山
の年月を経て、技術者となり生業とな
り、社会的評価などないが、身の丈で
の楽しい職人生を送ることが出来まし
た。これは皆、その時代の万物のおか
げ様での事、受けた恩はお返しをと、
ボランティア活動もさせて戴き、心和
やかな時も持てました。

技術ばかりでは、世に立てない、立つ

ても機械だ。是非共相応する徳行がな
ければならぬとは、野口英世先生の言。
今世の中AIなどと私には、理解不能
な位、変化を遂げています。これから
特に、医学界などは、重要な最先端の
進化となる事と思います。お役に立て
るならこの度、白菊会に名を連ねさ
せて戴く事が出来ました。感謝致しま
す。

無 題

大 森 重 則

私は理容師をしています。三年前ま
でお店を借りて営業していました。し
かし、デフレには勝てず閉店しました。
今では出張をしながらなじみのお客さ
んの散髪をしながらの生活です。世間
話しをしながらの仕事は楽しみです。
私は美術館が大好きで、東京の美術展
は、印象派から前衛派までだいたい
の展覧会を見て来ました。私は写真を趣
味に長年白黒からカラーを撮影して来
たので、たくさんの作品を作って来ま

した。でも白黒写真は十年以上前にや
めました。体力が続かなくなりました。
それでもNHKテレビに出演した事が
ありました。それが私の誇りです。夜
のマンホールに車のテールランプが流
れる写真です。その作品が県の芸術祭
で入選しました。三十年も前の話です。
いい思い出です。今でもポジフィルム
カラーで、身近な堤防の風景をとり続
けています。いつの日にか、写真展を
するのが夢です。

一年半前に東京の姉が亡くなってし
まって、私の兄弟はだれも残っていま
せん。兄二人が二年続けて亡くなり、
四人兄弟は私一人だけになってしま
いました。父親は私が高校一年の時に亡
くなり、母も二十年以上前に亡くなっ
てしまいました。父は、水戸の農協共
済連に大子町袋田から通勤していま
して、お母さんは腎臓を患いその時生ま
れたのが私です。だから兄弟の内
で、体が一番弱かったのも痩せ
ていました。いままで太った事
がありません。こんな私を丈夫に育てて
くれたのだから、皆の分まで長生きしな
ければと回りの友達が言ってくれます。

友達がたくさんいるのでちつとも寂しくありません。職業からお話しするのが好きです。堤防を歩く仲間が二人できました。世間話しをしながら歩くのは楽しいものです。残された人生を大切に生きていこうと思います。それでは又来年便りを送りたいと思います。最近日本画家の程塚敏明展を見ました筑波大学芸術系准教授。

無題

小林 久江

私の主人も十年前に、本人の強い意志でしたので反対の声もありましたが、献体させていただきました。

主人は昭和二十年代弘前の東北大学で、医学の道をめざしていたそうです。その頃は献体などなかった時でしたので、路上で倒れていたこじきさんを拾ってきて解剖したとのこと。半分くさりかけていてその匂いたるやすごかったとの事です。主人は魚も生ものも食べられない位匂いに弱かったので結局医

師の道をあきらめたとのこと。師の道をあきらめたとのこと。

そういう経験から自分の体役に立てたいとの意志でしたので献体させていただきました。白菊会にも出席し解剖学の招待を読んでみますと、本当によかったと思います。

私も子供達には献体をしてくれる様にと願っています。会員数も沢山になったとのこと、本当によかったと思います。お医者さまになるといことは、私達に分からない大変なことが多いと思います。

生きる希望は

どこにあるのだろうか？

佐々木 利男

今日までの七十八年余りの生涯において、心底から喜びを持って人生を歩んできたことがあるだろうか？ 私には、とてもそうは思われない。自分のみならず、周りの多くの人達の苦難を見るに付け、人生とは艱難辛苦そのものだと思わざるをえない。何故にそこ

までして、私達は生きなければならぬのか？ 私には分からないままに、この世を去ることになりましょう。

父を筑波大学に送り出して

高橋 利子

春まつさかりの今年四月二十五日、わずか十日間の入院で、父はあつという間に天国へ旅立ってしまいました。九十三才でした。

翌日、父の遺言通り、人生最期にして最大のボランティア活動献体のため、迎いの車に乗り、筑波大学へと出掛けて行きました。

十六年前にも母を筑波大学へと送り出しました。やがて私も献体というボランティア活動に参加する予定です。

今は父と同じように、腹話術による施設訪問や公演、石岡市のプラチナ事業で、交通安全や献体の事を楽しく真面目におもしろくおしゃべりしています。

白菊会創立の年から、私は父の随行

という形で出席。三年目以降、父・母・私は会員として参加していました。(父は、白菊会創立以前からの献体者で、創立と同時に白菊会会員になりました)今年に入ってから父は、施設訪問や地元小学校の卒業式や入学式にも出席しました。

大正生まれの父、市や県、厚生労働大臣からの表彰に加え、緑綬褒章を頂いたり、民放やNHKのテレビ局や各新聞社の取材もたくさんあり、それなりに素晴らしく有意義な人生だったと思います。それらの締めくくりが献体だったと、今しみじみと噛みしめています。

献体を決意

武石 久美子

父は六十六才の時、くも膜下出血で入院して一カ月後に逝ってしまいました。私は二十二才でしたが大好きだった父の死に、これ以上は無いいという位の衝撃を受けました。

母は七十才で喉頭がんを発症して手術を受け、幸い成功して声も失わずに九十五才の大往生を遂げました。私も六十一才の時にがんを発症して、十年が経とうとしています。この十年間、本当にたくさんの人に助けられて来ました。

自分の最後を真剣に考えました。その結果、献体することに決めました。心がスッキリしました。交通事故などに遭遇せず無事に献体できますように、一日一日を大切に生きていきます。

無題

長谷川 愛子

私、昭和九年生まれです。八十五才に成りました。

本年二月三日、白菊会会員に登録させて頂きました。八十才を過ぎ、最終章をどう生きるか、又人生の最後をどうするか、多々考えて見ましたが決まりません。

ある時友人が施設に入り話も絶えてしまいました。息子さんに逢い「お母さんは元気」と一言。母は亡くなりましたと、何んの連絡もなく驚いたところ、献体を希望していたので献体させて頂きましたとの言葉に啞然としました。通夜も葬儀もない献体の基本を知りたく、大学に資料を申し込みました。二日後パンフレットが届きました。



資料を読み身内に相談したところ、初めての行動に驚いた様子でしたが、時間が過ぎるに合せて理解をして頂き、献体の運びとなりました。

寝ても覚めても臨終の事を考えても、後は見ることも確められません。

今回初めて献体によって、小さな身体が医学の発展に医療の研究にお役に立てると思う時、心の底から歓びになり、さわやかな清命となりました。

これからは何の迷もありません。命ある限り元気で人に迷惑のわからない生活で、残す日々を過して参ります。

生きる事に感謝

平 石 賀須子

筑波大学白菊会事務局の皆様毎日御苦勞様です。今年も「筑波しらぎく」会報の書面を頂き、一年の早さを痛感して居ります。ですから一カ月はアツと云う間です。去年も書きましたが題名には、いつも苦慮し今年も結局今こうして生きて来て、週一回のデイサー

ビス、月一回の老人の集い他色々な会合に行き、笑いお喋り、又週一回家族との外食それらも皆生きているから出来る事であり、実際は今の私は「心筋梗塞」を八年前発病して以来、色々な病名を持つ身で手は震え、足首から指にかけて両足痺れている状態です。でも私としては書く、歩く、喋る、笑う、考える等皆りハビリの気持ちで行っているのです。

私の趣味として、今新聞投稿をしていて色々な分野に投稿し、偶々掲載されると一日中浮々します。でも今は投稿者が多く狭き門となりました。現在百歳は珍しくない時代ですが、私はまだ九十四歳！九十七歳で亡くなった母を目指しているのですが此ればかりは：来年の事は分からないけど、今年「しらぎく」の原稿が書ける事は、どんな状態であれ生きているからであり、私の周りの人達、私の今の現状、書けば切が無いが感謝、感謝の一言に尽きます。

アイス食べ

美味しさ分かる 有難き



解剖実習を終えて

伊藤 嘉郎

六週間の解剖実習を終えて、大変だった実習が終わって正直ほっとしている。それと同時に、これほど学ぶことの濃い六週間はあったのだろうかと思いつている。というのも、医学的な勉強としても、とても学ぶことの多いものであっただけでなく、実際にお身体をご提供して下さった方のお顔を見たり、心情を考えたりすることで、道徳的な面でも学ぶことがあったと思っている。それぞれについて具体的に書いてみたいと思う。

まず、医学的な学びとしての解剖実習について。実習を通して常に感じていたことは、想像を超える人体の複雑さである。骨だけでも二〇〇個、筋肉だけでも六五〇個ほどあり、さらにその間を血管や神経が通っている。普段何気なく生きている私達も、このような複雑な機構によって支えられているのだと思ひ、人体の神秘を感じるこ

が出来た。それと同時に、病というのはこのうちの一つでも正常でなくなる起こるものであるから、いつ起きてもおかしくない人間には切っても切れないものだという感想を持った。そして、それぞれが複雑な関連を持って動いていることが多いという感想も同時に持った。例えば、顔面神経は表情筋、アブミ骨筋、涙腺、唾液腺、舌の味覚という全く別のものをそれぞれ支配する。このことから、ひとつのものが上手く働かなくなると色々な他の器官にも影響が出るばかりか、ひとつの病気を治すために何か施したらほかの器官にも影響が出るということを実感し、そうした関連は医師になるにあたって正確に覚えておかななくてはならないと身が引き締まる思いになった。また、解剖実習は、今までに習ってきた基礎医学の知識を増強する効果もあったように思う。今までに習ってきたことは、言葉やイメージとして捉えたり暗記したりしていても、実物として想像出来なかつたためあまり実感として感じられなかつたが、解剖実習で自分の目で見たことよって実感として捉えられ、

知識が定着したように思える。そして、破格の存在にも驚いた。我々の班では、腸腰動脈が総腸骨動脈から出ていたり、脾静脈が上腸間膜静脈から直接出ていたり、珍しい破格があった。このように、人によって教科書通り行かない部分があるので、手術の際などは気をつけなければいけないという学びもできた。

次に、道徳的な学びとしての解剖実習について。一日目、ご遺体の布をめくり、お顔を見た時、色々と考えることがあった。どのような気持ちでお身体を提供して下さったのだろうか、ご遺族はどう思ったのだろうか、といったことだ。そういつた気持ちはご本人しか分からないことであるが、本来ならば生きた時のままのお姿でお葬式が出来たものを、我々医学生のためにお身体を提供して下さったことに感謝の気持ちで一杯です。こんな機会をいただいたのだからしっかり勉強して良い医師にならないと申し訳ないと改めて身が引き締まる思いになった。また、何気なく解剖実習後にしらぎく会の冊子を見た時に、我々が解剖したと思われ

る方の写真を見つけた。その時、この方はどういう性格でどんな人生を送ってきたのだろうかという思いを巡らせた。この方は一人の人間なのだということ、は頭ではわかっていたが、実感を強く得たのはこの時が初めてであった。それと同時に、病気を診るのではなく、人を診なければならぬという意味がわかったような気がした。

このように多くのことを学んだ解剖実習であった。この学んだことの一つひとつを忘れずに、これからも勉学に励んでいこうと思う。

大賀 浩 銘

ご遺体と初めてお顔を合わせたとき、解剖実習がいよいよ始まるという不安や緊張、興奮、高揚感といった様々な感覚を覚えたが、何よりも鮮明に覚えているのは、これから解剖実習を通して様々なことを学び、医師になるための大きな一歩を踏み出せるという嬉しさ、自分が医学生であるという実感であった。入学以来、実のところ私は

その実感を得たことがなかったが、ご遺体とお顔を合わせたときに初めて得られた。今までの教養科目や基礎医学の講義では、自分が医学生であるという事実を意識させられたことは正直に述べるべく、自分自身医学生であるということがしつくりとこなかった。しかし、解剖実習室に足を踏み入れ、ご遺体のお顔を拝見した瞬間に私は医学生で、将来医師になるのだということが、すつと自然に受け入れられてしまったのである。私は解剖実習が二年生の春学期にあつて良かったと終えた今では考えている。始まる前までは、六週間に詰め込まれて春学期にやらくらいなら秋学期や三年生で行うのがいいのではないかと考えていたが、今ではむしろもっと早くても良いとさえ考えている。なぜなら、自身が医学生であるという自覚は勉強に対するモチベーションを高め、模範的な医学生らしく行動できるようになるからである。これまでの大学生活では、勉強面で少し怠けてしまったが、この後の学生生活でまだ大いに挽回できると考えているので、二年生の春学期という比較的



早い段階で、喝を入れてくれたことに感謝し、この後の臨床分野は頑張りたいと思う。

今回の実習で、医師という職業の重さの片鱗にも触れた。私は身内で亡くなった人はいるが、ご遺体に文字通り触れたことは無かった。初めてご遺体に触れたときのあの冷たさは一生忘れられないと思う。また、触ったときに

「死」というものも強く感じた。医師が戦っていかなければならぬもので、我々にこの先一生付きまといてくるものである。そう考えたときに医師は人の生死を左右し、命を扱う職業であることを強く実感した。

また医師という職業は目指すことそれ自体にすら覚悟が必要であるということが、解剖実習を通して身に染みてわかった。これから医師国家試験を受け、「医師」を名乗るまでのおよそ四年半、死に物狂いで勉強に励み、あらゆる知識を吸収しなければならぬ。そうでなければ、ご遺体いただいた方々、ご遺族の方々に対して、将来、我々医学生のためにお身体を提供してもよいと自ら進んで志願してくださっている方々に失礼である。学生は勉強も大事だが、遊んだり、サークルや部活に勤しんだりすることも大事だと云う人もいる。しかし、それはあくまで医学生ではない一般の学部の子生の話である。我々医学生は多くの人々の大きな支えによって、こうして学ぶことが出来るという事実を真摯に受け止め、日々学び続けなければならない。

最後に、我々にお身体を提供してくださった方と、そのご遺族の方に多大なる感謝の念を示したいと思う。本当にありがとうございます。

小川直輝

解剖実習が始まる前日、自分は不安だという気持ちを抱えていた。今まで生きてきて人の死に直面したことはなかったし、ましてやご遺体を触った経験などはなかった。いろんな初体験がある中で自分は六週間実習をこなすことはできるのかと不安に感じていた。しかし、一方でついに解剖実習が始まるといふ一種のわくわくを感じていた。解剖実習といえば医学生の間において最も大きな試験の一つであると同時に、膨大な知識を手に入れることができ、大きく成長ができる機会である。六週間後、自分が医学生としてどれくらい成長できているのか少し楽しみであった。

解剖実習が始まると生活は多忙を極めた。毎日遅くまで予習復習し、学校

ではかなりの量の実習を進めた。二週目あたりから疲れとそれに伴うストレスが増えていき、きつい日々が続いた。しかし知識が確かに増えていっているという実感があり、少し心地よくもあった。実習の終盤に差し掛かると次第に慣れていったのか、手際よく実習を進めていけるようになった。ところがそれと同時に一日の情報量も多くなり予習復習は大変であった。それらをすべて乗り越え解剖実習を終えた日、六週間に及ぶ長い実習がやっと終わったという安堵と開放感に包まれていた。

自分が解剖実習で大切だと思ったことが二つある。ひとつは実際に見て触れて学ぶことの重要性についてである。予習の時に手引きとアトラスを使って学んだ時はよくわからなかったのも実際に解剖してみるとすぐに理解できたということが多くあった。百聞は一見に如かずとはよく言ったもので、本で学ぶだけでなく実際に五感を使って学ぶことが重要であるし、効率的でもあるということがわかった。もうひとつは班員とのコミュニケーションの重要性である。今回、自分の班は四人

班で実習を行った。上半身と下半身を交互に解剖することになるが、片方の部分の解剖に夢中になっているとほかの班員が解剖しているもう片方についてはよくわからない。解剖を進めていく中で前日どこまで進んだのかわかっておかないといけないし、班員それぞれがすべての部位について理解していない。そのため、手引きのどこまで進めたのかということを実習のはじめに共有しておく必要がある、そこで得た知識についても共有しなければならない。これは医療現場でも似たようなことが言える。一人の患者に多くの人が携わるため、患者の情報をチーム内で共有しておく必要があるのである。

最後に、今回自分は解剖実習でとても多くのことを学んだ。つらかったが多くなことを学べたことはうれしかった。このような機会を得られたのは亡くなった後に、自分達医学生のためにお身体を提供くださった方々のおかげである。ご献体された方々は、自分にとって多くのことを教えてくれた先生といえるだろう。このことを肝に銘じ、

感謝の気持ちを忘れずに今後医学を学ぶ上で今回学んだ解剖の知識を生かせるようにしたいと思う。

北 出 実 鈴

解剖実習では人体の構造や仕組みを学ぶことができただけでなく、将来医師になる医学生として考えさせられることがたくさんあった。実習を始める前は先生や先輩から体力的にも精神的にも辛いと何度も聞かされてきた解剖実習を自分が乗り切ることができるとかという不安とともに今まで私たちと同じ世界で同じように生きていた人の身体にメスを入れなければならぬということに対する不安で一杯で他のことは考える余裕がなかった。

実習の回数を重ねていくと不安な気持ちはだんだんと消えていき、特に実習の始めと終わりに行う黙祷でご献体された方やそのご遺族に思いをはせるようになってきた。ご献体くださった方の医療の未来に役立ちたいという遺志があるとはいえ、ご遺族やその方を

産み育てた家族の方々の気持ちを想像すると、どうしても自分が解剖を行うことで亡くなった後のきれいな状態で供養してあげられないこととなり、申し訳ないという気持ちがあふれ出してきてしまうのだった。しかし自分のできる最善の選択は実習を放棄することではなく、ご献体くださった方から最大限の知識を吸収することだと言いついて聞かせて実習を続けた。

また、先生が実習で毎回行う黙祷でご献体くださった方と対話するようにしているというのを聞いてから私も同じようにすることにしました。毎回、解剖させていただくことへの感謝の気持ちと今日もたくさん学ぼうという決意を伝えるようにしていたが、それでも足りないと感じた。大切なお身体を解剖させていただいたという恩はご献体くださった方に直接返すことはできない。それでも自分が医師になり一人でも多くの患者さんを救い医療の発展に貢献することによって、この方の願いは果たされるのではないか。そう思いこの実習で一つでも多くのことを学び、恩返しをするためにも医療に奉仕したい

という気持ちがありますます強くなった。

実際に解剖して身体の中を観察するとその方が生きた証と言える痕跡が数多く見られた。私の班のご遺体は多発性癌により亡くなったと聞いていたが、実際に主に腹部で癌とみられる構造があり、血管もそれに適応する形で側副路が発達した様子なども見られた。座学だけで人体の仕組みを学んでいると人の身体は全て同じように働いていると思ひ込んでしまいがちである。実習ではこのようにただの模型ではなく、ひとりの人間の構造を、また他の班のご遺体と比較して観察することで人間がどのように生命を維持し活動しているのかを学ぶことができた。人体の仕組みには基本構造があるものの、一人ひとりが少しずつ異なっているということをもつて体験できたことで今後の学習もより円滑になるだろうし、将来医師として患者さんの治療にあたる際も的確な判断を導くことに役立つだろう。

実習最終日、ご遺体を納棺した。用意された棺の中に遺品が入っている班もあった。この人はどんな人生を歩ん

できてどんな声をしていたのだろうか、どんな考え方の人だったのだろうかと改めて思いをはせずにはいられなかった。涙を堪えることができない同級生も大勢いた。ひとりの人間が亡くなってしまったのだという実感がこの場で再び湧いてきたことによる悲しみもあった。しかし、たくさんあった感情の中で一番大きかったのはやはり大切なお身体を私たちのためにご提供してくださったことへの感謝だった。自分や自分の家族の人生が終わったとき、献体できるかと問われると正直なところ今はまだそこまでの覚悟ができない。献体するということはとてつもなく大きな決断だ。その決断をした白菊会の方々とそのご遺族に対して心から尊敬したい。そして、ご献体くださった方に感謝の気持ちをお忘れることなく今後も生きていこうと思う。また、その方々の期待に応えられるような医師になり社会に貢献するために日々の勉学に精進したい。

佐野友宥

解剖実習は長くて大変である。これは医学生の中でよく言われることである。私も、実習が始まる前はそうに考えていた。しかし実習を終えてみると、全く長いと感じなかった。体感ではむしろあっという間に、そんな感覚である。それだけ、人間の体の中の構造の情報量は膨大だった。

ではどれくらい膨大だろうか。ある時、近況報告として人体の解剖を行ったことを周りの人に言うと、とても驚かれた（多くの人は解剖するものとしてカエルや他の動物を想像しているらしい）。そしてある時、ご遺体を模型のようなもので代用できないのかと聞かれたことがあった。確かに、そうすることができれば、いろいろと楽かもしれない。しかしそもそも、人体のすべての構造を忠実に再現した模型を作ることなどできるのだろうか。私はその質問にすぐさま、「無理だと思えます」と答えた。なぜなら、その質問をされた時に、剖出に苦労した体内の緻密な血管や神経の構造が、頭に思い浮かん

できたからである。あのような緻密かつ繊細な構造を人間の手で作ることでできない、そう思ったのだ。

しかし、無理だと答えた理由はその一つだけではない。もう一つの理由は、破格の存在である。人体の構造に正解は存在しない。一人ひとり異なる構造を持っている。私の班が解剖したご遺体にも破格が存在したが、その存在を無視して模型として画一化してしまうことは危険であるどころか、破格の発見がむしろ解剖学の発展に重要である。また破格だけでなく、臓器など体の全体的な状態も、死因や病歴によって一人ひとり異なっていて、それぞれの体がそれぞれの人生を物語っているように感じる感覚は、模型では到底得ることはできないだろう。

これらのことを、私は無意識に熱をもって答えていたことを覚えている。それは実習を終えて、ご献体された方を模型と同列に考えられないほど、大切に考えていたのかもしれない。実際、自らのお身体を私たちの解剖実習に提供して頂いた方々には頭が上がらない。その方々のおかげで私たちは貴重な実

習を行うことができたのである。毎回の黙祷の時間で、私はご献体された方と対話することができただろうか。毎回感謝の言葉を心の中で投げかけていたが、当然応答はない。それだけに生きている間にお話を聞きたかったと思った。そしてその時、自分は生きている存在であるということを実感させられた。この経験から生きている人間として今自分にできることは、医学を学んで医学の発展に寄与することである、そう考えると身が引き締まる思いである。

ただ、解剖実習はまだまだ終わらない。脳の解剖がまだ控えているだけでなく、そもそも今回の実習でも完璧に把握しきれない部分もある。医学は発展をやめない限り、常に勉強しなければいけない学問であると考えているが、解剖はその医学の根底に位置する。当然解剖の知識は頭に完全に入れて置かなければならない。

このような思いと高いモチベーションを抱いたのは、正直なところ、医学の勉強を始めた時以来である。これまで基礎医学として学んだばらばらに



なっていた知識が、解剖学の勉強を通して初めて統合されていく感覚を覚えた。そして、解剖実習が二年生ということの時期に行われる意義を理解することができた。これから臨床医学の勉強に入ると思うが、この思いを忘れずに、勉学に励みたいと思う。そして改めて、ご献体された方々に感謝し、ご冥福をお祈りいたします。

杉 本 理 紗

先日、長いようで短かった解剖実習を終えた。今思い返すと一瞬のように過ぎていった六週間であったが、同時に学ぶ内容がとても濃密な六週間でもあった。解剖実習というのは医学部では皆が通る道であり、始まる前から緊張の気持ちがあった。実習初日、白衣を身につけ遂に始まる、と思いつながら実習室の中に入った。ご遺体を前にしてどのような感情が思い浮かぶかは想像もできなかったが、最初の黙祷を終え初めてメスを入れた時は、より一層緊張感を感じ、身が引き締まった。特に慣れない最初の頃は、毎日の長い実習に加えて帰宅してからの膨大な量の予習・復習は正直とても大変だった。自分にやりきれぬのか、と思う日もあったが毎回ご献体してくださった方のお顔が浮かび、毎晩努力を続ける動機になった。このような大変な毎日ではあったが、周りには同じ経験をしている同期がいて、同じ班でなくてもわからないことがあれば助け合い、お互いの相談に乗って、皆で乗り越えようとする

精神はとても心強かった。

解剖実習が始まり、神経が筋肉を支配しているところや細い神経が体の中を迷路のように存在すること、血管の太さ、などに感動した。今まで他の基礎医学のコースで神経の仕組みや働きについて学んでいたが、実際のものを見ると、この構造によっていま人間が複雑な動きをして、色々な感覚を持つということが実感し、人体の構造の深さにさらに魅了された。

また、解剖実習が進むにつれ最も驚いたのは、人体の構造は一通りではない、ということである。このことは解剖実習が始まる前から知っていたし、このような違いから先天性の疾患などが起こることをも知っていた。だが、実際に教科書には一本と書いてある血管が二本見つかり、臓器の主流な栄養動脈として覚えた動脈がないにも関わらず他の動脈が補っているのがわかり、人生は無限の通りの歩み方がある。それによって、人体の発達の仕事も異なるからこそ色々な特徴のある教科書通りにはならない私たちが存在する、ということを実感することができた。

このような新しい発見が毎日あり、興味を掻き立てられる実習も毎日の課題をこなすうちにあつという間に終わってしまった。実習の最後の日に毎日私たちの指導をしてくださった教員がこのようなことをおっしゃっていた。「あなたたちはこの解剖実習を通して初めて人を診たのだ」生前お会いするとはできなかったが、色々な人生を歩みご献体してくださった方が私の最初の患者さんである、ということを実感し、感謝と感動を感じた。同時に申し訳なさも感じた。最後の解剖実習が終わり少し落ち着いてから思うと、精一杯予習、復習を行い、実習にも励み、やりきった気持ちもある。だが、一生で最後の解剖になるかもしれない、と思うとやり残したことがあるのではないかと不安になってしまった。これからは、この申し訳なさを全く感じなくなるくらい、最初の患者さんが天国から誇らしい気分になってもらえらるような立派な医師になれるように精一杯頑張りたいと思った。

また、この六週間で毎日朝から晩まで学生の指導にあたってくださった教

員の皆様に感謝をしたい。私たちの教科書上でしかわからなかった知識に対してご献体してくださった方の色々な特徴に結びつかせていただき、ときには励ましの言葉をかけていただき、この実習を無事に終えるようサポートしてください、本当にありがとうございます。先生方の指導があつてこそ医学という学問の深みを感じる事ができたのではないかと思います。

最後に、ご献体してくださった方に感謝の気持ちを述べたい。最後の黙祷をしている時、私はご献体してくださった方と会話をしながらどのような人生を歩んだ方なのか、と考えた。多分、とても心優しい方であつたに違いない。一生私の頭に残る人体の地図をください、人体には色々な特徴がある、ということも教えてくださったご献体してくださった方には毎日の黙祷だけでは感謝の気持ちを言い切れなかつた。私の最大の先生であり、お身体を最初に診せてくださった先生にお礼を言いたい。ありがとうございます。

田原 沙絵子

基礎医学の集大成である解剖実習を終えた今、本当の意味で医学生としての自覚と責任が生まれたのではないかと感じる。この実習では、人間の構造の理解のための解剖実習というだけではなく、医師に求められる倫理観や責任感および役割も学んだ実習であつた。

最後の日に、先生がおっしゃつた話の中でこのような言葉があつた。「患者さんの病気ではなく、患者さん自身を診なさい。ということをお願いしますが、君たちはこの解剖実習を終えた今その意味を初めて理解できるのではないのでしょうか？」患者さん一人ひとりにはそれぞれの人生・ストーリーがあり、それぞれの思いがある。だからその方々の思いをくみ取る必要があるということと言葉の上では理解していたつもりであつたが、あくまでも言葉の上での理解だつた。ご遺体には教科書の記載とは違った破格があり、さらに筋肉の厚みや臓器の様子など様々なところからその人の生きてきたストーリーが伝わってくる。患者さん自身でさえも言



葉では表現できないような自身の人生を、全身を介して語ってきているような感覚であり、驚きを隠せなかつた。具体的に述べれば、私たちの班のご遺体では、癌による影響からか脂肪が落ち、やせ細つた外見をしていながらも筋肉・臓器が他班よりも大きく大柄な人であり、何かスポーツをしていたということが想像された。また、一見す

ると臓器の大部分は正常を保っており、その方の体内で何が起こり、死に至らしめたのかわからなかった。しかし、解剖を進めていくうちに、前立腺癌の転移が左鎖骨下のウイルヒヨウのリンパ節にまで転移していたという病気の進行過程を掴むことができ、終末期には全身が癌によって侵されて苦しい思いをしていたのではないかとということが想像された。一方、他の班のご遺体では膵臓癌が横隔膜の裏を含めた広範囲に転移していたり、胆管癌によって胆管周辺の組織が固くなっていたりして、一目でわかるほど体内の様子が違っていた。それらを自分の目で直接見て理解した時に、やっと医師になるためのスタート地点に立てたような気がした。患者さんを「診る」ということは、患者さんの全身で何が起きているのか、その真実を見定められることであると思う。その役割は、人体の構造や組織に誰よりも通じ、病気に対する適切な治療を十分に学んだ医師が先頭に立って努めていくものであると思う。患者を「診る」目を持った医師になるためにはそれ相応の知識が必要であり、さ

らに新しい知識も取り入れ続けなければならぬ。今までの基礎医学の重要性とこれから始まる臨床的な学びの重要性をこれまでになく感じた。

この解剖実習はご献体してくださった方を始めとして、白菊会の方々、一カ月間ご指導くださった先生方や班員の協力があって成り立っていた。特にこの解剖実習のためにお身体を提供してくださった方に感謝を申し上げたい。そういった方々がいるおかげで、自分が本当に貴重な経験と学びをさせていただいていることを今後とも忘れないようにしていきたい。また、実際に手を動かして実習を進めていく上で班員の協力は必須であった。班員によって解剖している部分が違うため、その日の進行状況を毎日確認していかなければ引継ぎが上手くいかず時間を無駄に使ってしまう。予習復習が必須な上、毎日続く実習で班員の多くに疲れが見え始めるとそういった連携が億劫になり上手くいかなくなるが、その様子に配慮しながら進行が遅れないように進めていくことはこれから臨床の現場に出ても重要であると感じた。これから

も、自己研鑽に励み、仲間を大切にしながら医療行為を行える医師になれるような姿勢で臨んでいきたいと思う。

根 岸 駿太郎

医学生としての学びにおいて特に重大なイベントとも言える、解剖実習を終えた。話に聞いていた通り、一生忘れることのないであろう、濃く、新鮮な六週間であった。実習の初回で白衣に着替え、実習室に入った時点で、これまでの実習とは全く違う空気を感じ、緊張に震えながら先生のお話に耳を傾けた。目の前のご遺体とどう向きあって実習に臨んでいくのか、という予想も覚悟も定まらないまま、解剖実習が始まったのだった。

テクノロジーが発達したこの時代にも、亡くなった方のご遺体を解剖させていただき、学びとするといいことが行われているのは、一見不思議に思えたことがあった。講義でも実習でも、大学における教育というのは特に、合理性と効率を重視して改革が行われて

きたように、私は入学以来感じていた。それは、講義においてデジタルな板書を用いるといった表面的なことであったり、カリキュラムでさえ、医学を学び医師になるために必要な知識をいかに体系化し伝授するか、ということが常に考えられていたりする点だ。その点において解剖実習は、過去の積み重ねを特に重視して学習に役立てられてきたように思える。それゆえに、先人たちの発見を実習書で学び、ご遺体を実際に手で感じとりながら学習を進めることができたのだった。この先どのような改革が起きようとも、医師という職業が、またそれを目指す医学生が生まれ続ける限り、ご遺体での解剖実習が行われなくなることは絶対にはないのだと、そう思えた。

世の中にこんなにも、「自身の身体をもって教える」という行為は他にないのではないだろうか、と何度も考えた。たったひとつ与えられた身体で各々の人生を全うされた方々が、見ず知らずの我々のためにお身体そのものを提供してくださる、というその事実。かつて命がやどり、何十年も一人の人として

生き続けていたお身体を、隅々まで、何もかも観察し尽くすことを自ら望み許可してくださった勇氣とご厚意に感謝せずにはいられない。自分の身体を提供するということに抵抗を持つ人は少なくないだろう。それは、一人ひとりに一つずつ与えられた身体というものに、各々が運命であったり、生んでくれた親への感謝だったり、その人生を通してどこか愛着を持つがゆえで、それは決して責められるべきことではない。特に現代では、人体は持ち主だけのものであって他人の所有物でないという考え方が広まっているためか、客観的にもこの考え方は受け入れられるように思える。形のあるもので、生まれてから死ぬまで不変なものは自分の身体だけ。そんな自分の身体を、たとえ死後であっても手放したくないと思うのは何も不自然なことではない。そんな中であって献体への登録をしてくださるすべての方に、感謝と尊敬の念で一杯である。亡くなった方に直接お礼をすることはかなわないうえ、まだ未熟である我々が自分の手だけでご遺体から学べることには限りがあった

が、それでも感謝の念だけは最後まで一貫して持ち続けること、それが、いま我々に為せる唯一の礼儀であると確信した。気づけば、実習の終盤では、「この方とお話をしてみたかった」などと自然と思うようになっていた。勝手な感情移入は避けられるべきかもしれないが、このことが、自分がきちんと、誠意を持ってご遺体と向き合っていたことの現れであるならば、それはいいことであると思う。

今後、私達が人生をかけて挑まねばならない「人体」というものがいかに深いものであるかを垣間見ることができた六週間であった。今後臨床医学を学ぶにあたって、この実習のどこかのシーンが思い浮かんで、より実のある学習につながるのだろう。まだ長い道のりではあるが、やがて医師となり世に尽くすという大きな目標のために、これからも研鑽を積み重ねて行かねばならない。そうすることで初めて、形ある恩返しを果たせるのだろう。

松吉康志

解剖実習が始まる際、私は今までに体験したことのない緊張感や不安があった。今までの学生生活では教科書や図譜などでの学習がメインであり、実際の人の身体と対峙する授業がなかったためであろう。ご献体された方と初めて対面した時の気圧されるような感覚は今でも鮮明に覚えている。この六週間の解剖実習をさせていただき、医学生として大きく成長できたのではないかと思う。

実習が始まった当初は、ご献体された方にメスを入れさせていただくことに対して「申し訳ない」という思いや戸惑いがあった。しかし、数日後には「医学生として必要なことを学ばせていただくために、生前お会いすることもなかった我々医学生にご協力いただいているのだ。ご献体された方々やご遺族の方々の厚意に応えられるように頑張ろう」と思えるようになった。その思いを強く胸に刻み、予習・復習にも今までの科目以上に毎日注力することができた。

六週間という長い間、解剖実習で人体の構造をご献体された方々のお身体で実際に見させていただき、「ここはここのようになっているのか」や「ここはあそこと繋がっているのか」というようなことをご献体された方々から教えていただいた。今まで教科書で人体の構造について学習し、理解しているつもりではあった。それでも「百聞は一見に如かず」という諺があるように、実際に自分の目で見ることで初めてわかることが日々いくつもあった。実習を通して、自分の頭の中に地図が広がるように、人体の構造に対する理解をより深めることができた実感した。

医師として働いている方々に「医学部の勉強の中で重要な授業は何か」というお話をうかがうと、皆さん口をそろえておっしゃるのが「一番大切なのは解剖学である。人体の構造や機能を十分に理解していないと医師としては働けない」ということである。そのくらい貴重な学びを体験する機会を与えていただくことができたことを幸甚に思う。解剖実習に実際に携わることができるのは医学生だけである。解剖実

習を経験したことで、「自分は医学生なのだ。医師として地域に貢献するのだ」という思いを改めて強く感じることができた。この実習で学んだことを今後の学習に活かしていきたいと強く思う。最期に、ご献体された皆様やご遺族の皆様、この度は我々筑波大学の医学生のために非常に貴重な体験をさせていただき、本当にありがとうございます。



した。皆様のご協力がなければ解剖実習はできませんでした。この解剖実習では、今後医師として働いていく上で必要となる多くのことをご献体された方々から教わることができました。皆様の思いを胸に刻み、ご厚意に報いることができるよう今後も勉学に全力を傾注し、よい医師となつて社会に貢献できるように精進して参ります。

本橋 悠

私は解剖実習において、以下のようなことを学んだ。

まず、献体という非常に重要な仕組みについてである。私は解剖実習を始める前、実習に必要なご遺体はどのようにして用意されるのであろうかと漠然と考えているのみであった。しかし、解剖学のカリキュラムの中で献体について知ると共に、実際にご遺体を提供してくださった方を目の前にして、自然と真剣に取り組む気持ちが強まった。ご遺体を解剖していくと複数の病巣が見つかり、当たり前前であるが目の前の

ご遺体も元は病気にかかる普通の方であったことを改めて自覚し、感謝の念も湧いてきた。このように自分の解剖実習への取り組み方をより強く形作つてくださったという意味においても、現在改めてご献体いただいた方に対して感謝の気持ちを述べたいところである。

次に、木も見て森も見るということである。例えば、個々の神経の名前や働きを言葉で暗記することはもちろん重要であるが、その神経の立体的な位置を分かっているのと取り返しのつかない医療ミスを引き起こしかねない。これは机に向かつて教科書を眺めているだけではなかなか身に付かず、実際に自分の手で解剖を行うことが重要である。私は逆に、解剖実習の中で自分が漠然と考えていた臓器の位置が全く違うなどといったことを通して、木も森も両方見なければならぬということを感じた。

最後に、病ではなく人を診るということである。教科書や講義で勉強していると機械的に病気のみ視点が行ってしまいがちであるが、実際のご遺体



を使わせていただく解剖実習においては、その人がどのような方であったのか、どのような人生を歩んで来られたのかなどといったことを度々考えさせられた。解剖実習の場においては使い古された言葉ではあるかもしれないが、ご遺体は話さないが多くのことを語るといふのは本当であるをつくづく感じた。話は変わるが、実習最終日に先生が「夏

休みに心の中でご遺体と対話を試みて「ください」と言っていた。その時点でも既にご遺体を思い出しながら構造的なことから背景的なことまで思いを巡らせたり疑問を持ちかけたりできそうな気がしていたが、解剖のカリキュラムの直後に医師のプロフェッショナルなズムや家庭医療について学んだというだけで、ご遺体の目に見える情報の裏にある本人やご家族の感情や事情を重要視しながら様々なことを訊いてみたいと思えるようになった。今後、臨床医学を学び知識を蓄えていく中で、病気の物的情報だけでなく病気にかかった人のことを考えるために解剖実習で得た経験を思い出すことであろう。別の先生の言葉を借りれば今回解剖させていただいたご遺体はある意味私の患者さん第一号であり、私が病ではなく人を診ることを目指す大きなきっかけになったということは間違いない。解剖の知識に留まらない様々な情報を提供してくださった方には本当にありがたい気持ちで一杯である。

以上が、私が解剖実習において学んだことである。このような大きな学び

を与えてくださったご献体いただいた方には、改めて感謝の意を表したい次第である。この先解剖実習という大きな経験を忘れることなく、様々な視点で人を診られるような医師になりたい。



新
会
員

会員番号	氏名
二三九三	齊藤 俊子
二三九四	笠原 正男
二三九五	中川 美代
二三九六	中村 憲子
二三九七	石黒 きよ子
二三九八	大森 重則
二三九九	山口 しげ子
二三〇〇	安川 貴美子
二三〇一	渡辺 ちい子
二三〇二	杉永 政子
二三〇三	清水 ふみ
二三〇五	峯 久子
二三〇七	齋藤 康子
二三〇八	黒澤 秀樹
二三〇九	幕内 澄江
二三一〇	杉沢 三郎
二三一一	杉沢 美保子
二三一二	高橋 福重
二三一三	海老原 千恵子
二三一五	笹沼 功平
二三一六	木村 静男

二三二七	松浦 澄江
二三二八	伊山 正夫
二三二九	伊山 寿美子
二三三一	小島 昇
二三三二	武石 久美子
二三三三	長谷川 愛子
二三三四	齋藤 茂子
二三三五	安田 知子
二三三六	矢ノ倉 信一
二三三七	大沢 敏子
二三三八	黒田 俊一
二三三〇	齋藤 富榮
二三三一	並木 義夫
二三三二	並木 榮子
二三三三	城 美沙子
二三三四	五百部 良重
二三三六	長妻 洋子
二三三七	上山 由美子
二三三八	紺谷 操
二三三九	横須賀 景子
二三四〇	増 潤紀子
二三四一	笹島 和子
二三四二	佐藤 隆司
二三四三	松本 よし
二三四四	長澤 和子
二三四五	増 光伸

二三四六 和具 マリ子
 二三四七 石井 恵子
 二三四八 森田 光子



成願会員

会員番号	氏名	成願年月日
七一九	故大谷 淳	三〇・九・六
一四四	故渡辺 春雄	三〇・一〇・九
五一五	故小林 美津	三〇・一〇・二一
二二七	故新見 幸助	三〇・一〇・三〇
八二七	故菊地喜美子	三〇・一一・二
一四五	故久保田和男	三〇・一一・八
一四八	故渡辺眞理子	三〇・一一・九
一九一	故横須賀すみ	三〇・一一・二四
一二二	故高橋 文子	三〇・一二・二
一六三	故野村 利夫	三〇・一二・九
一七七	故齊藤 岑生	三〇・一二・一六
九八九	故山田 和枝	三〇・一二・二六
一五二	故奈良喜久子	三〇・一二・二七
一八一	故根本 家康	三〇・一二・二八
三七三	故瀬古澤 ^{せごさわ} すみ	三〇・一二・二八
一八五	故山崎 きく	三〇・一二・二九
一八二	故西澤 亮	三〇・一・三
一七〇	故大谷 明恵	三〇・一・六
一六一	故久保 ^{くぼ} すみ	三〇・一・八
一三五	故浅野 ハル	三〇・一・一五

二〇三	故村田富美子	三一・一・一八
二〇九	故大川 晁右	三一・一・二三
一四二	故磯部 陽子	三一・一・二六
一三三	故海老原仁三	三一・一・二八
二二二	故田村 則男	三一・二・一二
二〇五	故鈴木サト子	三一・二・一三
一七三	故伊藤 博	三一・二・二〇
一六八	故梅原フミ子	三一・三・一二
一九〇	故石田 安伸	三一・四・三
二二六	故中村 忠	三一・四・一七
一六六	故鈴木 洋子	三一・四・二〇
一〇四	故海老澤光義	三一・四・二六
二三〇	故千葉トキ子	三一・四・二九
一八二	故岸 千枝子	三一・五・三
一八五	故中田 恵喜	三一・五・六
一三三	故猪瀬 準藏	三一・五・二三
一七五	故片倉 周子	三一・五・二四
一六五	故石嶋 倫子	三一・六・一六
二二〇	故佐藤 文子	三一・七・五
二二〇	故都留 達也	三一・七・七
二二七	故今村 辰機	三一・七・七
一四六	故岸波千恵子	三一・七・一九
二〇六	故猪野 貞雄	三一・七・二七
一七二	故鈴木 繁	三一・八・一二



筑波大学白菊会 規約

(名称及び事務所)

第一条 本会は筑波大学白菊会と称し、その事務所を筑波大学医学群内に置く。

(目的)

第二条 本会は会員の親睦と献体運動の推進を図ると共に、医学の発展と人類の福祉に貢献するために、会員の遺体を筑波大学医学群に寄贈することを目的とする。

(事業)

第三条 本会は前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

- 1、 会員の親睦
- 2、 献体運動の推進
- 3、 会報の発行
- 4、 その他、本会の目的を達成するために必要な事業

(会員)

第四条 本会の目的及び事業に賛同し、自らの遺体を寄贈する目的を持って入会を申し出た者を会員とする。ただし、家族、またはこれと同様の者の同意を得た者でなければならない。会員は本人の希望により退会することができる。

(役員)

第五条 本会に次の役員を置く。

- 1、 会長 1 名、理事長 1 名、理事若干名、幹事若干名
- 2、 会長は、筑波大学医学群長が務める。
- 3、 理事は、筑波大学医学群解剖学担当の教員が務め、理事長の選出は、理事の互選による。
- 4、 会長は本会を代表し、会務を総理する。
- 5、 理事長は会務を統括し、理事は本会の運営に関して協議し会務を分担する。
- 6、 幹事は筑波大学医学群の事務職員の中から、会長が委嘱し、庶務及び会計を処理する。

(任期)

第六条 役員任期は 2 年とする。但し、再任を妨げない。

(顧問)

第七条 本会に顧問若干名を置くことができる。顧問は、理事会の議決により、会長がこれを委嘱する。その任期は 1 年とする。但し、再任を妨げない。

(会議)

第八条 総会は、年 1 回会長が召集し、事業報告及び会員の意見交換の場とする。

(会計年度)

第九条 本会の会計年度は、4 月 1 日から翌年 3 月 31 日までとする。

(経費)

第十条 本会の経費は、寄付その他の収入をもってこれに充てる。

(補則)

第十一条 この会則に定めるものの他、本会の運営に関して必要な事項は、理事の同意を得て会長が定める。

(感謝状)

第十二条 献体された遺族に対し、会長（医学群長）より感謝状を交付する。

付則

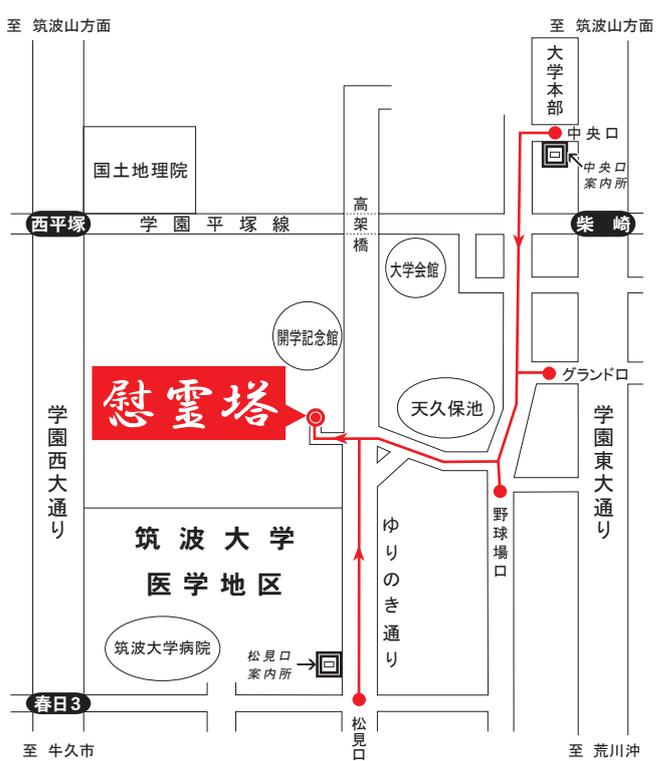
この規約は、昭和 58 年 4 月 1 日から施行する。

この改正規約は、平成 24 年 4 月 1 日から施行する。

筑波大学白菊会慰霊碑案内図



筑波大学白菊会慰霊塔案内図



(交通ご案内)

車利用の場合 (常磐自動車道)

- 土浦北I.Cから15分
- 桜土浦I.Cから23分

高速バス (つくば号) 利用の場合

- 東京駅八重洲南口 (②のりば) から「筑波大学行き」乗車 ~ つくばセンターまで70分

鉄道・バス利用の場合

- 常磐線土浦駅西口 (③のりば) 関東鉄道バス「つくばセンター行き」乗車 ~ つくばセンターで下記のつくばバスに乗り継ぎ
- つくばエクスプレス (TX) つくば駅隣接のつくばセンター (③のりば) つくばバス・北部シャトル「筑波山行き」乗車 ~ 「大穂窓口センター」下車

(所在地) 〒300-3253 茨城県つくば市大曾根根本333
(お問い合わせ) 029 (864) 6606

・お車でお越しの際は、上記の所在地あるいは電話番号をナビにご入力願います

(交通ご案内)

車利用の場合 (常磐自動車道)

- 土浦北I.Cから20分
- 桜土浦I.Cから20分

高速バス (つくば号) 利用の場合

- 東京駅八重洲南口 (②のりば) から「筑波大学行き」乗車 ~ つくばセンターまで70分

鉄道・バス利用の場合

- 常磐線土浦駅西口 (③のりば) 関東鉄道バス「筑波大学中央行き」乗車 ~ 「平砂学生宿舎前」下車
- つくばエクスプレス (TX) つくば駅隣接のつくばセンター (⑥のりば) 関東鉄道バス「筑波大学中央行き」または大学循環バス (右回り) 乗車 ~ 「平砂学生宿舎前」下車

お願い

ご住所を変更された場合は、新しい住所を白菊会事務局（電話 〇二九―八五三―三三三三）へお知らせ下さい。住所が分からずご連絡がとれないケースが増えています。



「会員が亡くなられた時に、していただくこと」
ご遺族の方々へのお願いです

一、ご遺体を大学へ引渡す時刻の打合わせ

まずご遺族の間で次のことをお決めになって下さい。

(1) お通夜をせずに直ちに引渡す

(2) お通夜をしてから引渡す

(3) お通夜をして告別式をすませてから引渡す

右のうちどれかにきまりましたならば筑波大学献体事務室の担当者（電話 〇二九・八五三・三三三〇）と、ご遺体引渡し場所と時刻を打合わせください。休日・夜間のお引取は大鵬社（電話 〇二九・八二一・八三三三）に直接連絡下さい。

ご遺体の輸送は大学がお引受けし、原則として自動車がお迎えにあがりますし、(1)の場合には必要があれば大学からお棺を持参することになっていますがこの点も打合わせて下さい。

(注) ご遺体の大学への引渡しは二十四時間を超えるときはお棺の中へドライアイスを入れ、ご遺体の保存に御留意下さい。

二、必要書類の用意

(1) 「埋火葬許可証」を急いでお取り下さい。これは医師の死亡診断書をそえて市町村役場へ「死亡届」を出すときにもらえます。

(2) 「埋火葬許可証」の記入の際、火葬場所は県内の方は最寄りの火葬場所をご記入願います。尚、県外の方は土浦市田中二丁目一六番三三三号、土浦市宮齋場、火葬年月日は一年後として下さい。

(3) 「解剖に関する遺族の承諾書」については大学から書式を持参しますので、ご署名とご捺印をお願いいたします。